
突然に・・・

太美

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突然に・・・

【Zコード】

N40960

【作者名】

太美

【あらすじ】

バイト先で、突然抱きしめられて始まった恋。

それは、突然の出来事だった。

私は、スイミングスクールでバイトをしていた。

夏休みなので、短期集中教室という通常のレッスンとは別に
早朝からプールで子供達に水泳を教える。

スイミングスクール単体なので、朝、昼そして通常のレッスンと実
施する。

短期教室の前には、もちろん準備体操を行う。
体操スクールも併用してあるので、体操場もあり子供達は元気に走
り回っている。

朝の短期教室が終わり、昼からの部に備えて昼食をとり、何気なく
体操場に入った。

体操場には窓があり、夏なので窓は全開だった。
その窓辺に佇んでる人がいた。

「何してるんだろう?」

そう思つて、声をかけてみた。

「そんな所でどうしたの?」

私の声に驚きながら、彼は振り返つた。

今年入社の笹川さんだった。

笹川さんは歳も近く、いつもバイト仲間とわいわいと騒いでる仲
だった。

「あつ・・・・・・・・

木村さんか

「どうしたの？暗い顔して・・・・主任に怒られたとか？」

笛川さんは曖昧な返事を返す。

「せーほり、怒られたんじやないの〜?」

そろいしなから、彼の隣に立った

た

身動きが出来ないくらいに、たつた数秒なのに動けない自分がいた。

「えつ！誰か来ちゃうよ。」

「大丈夫。あと5秒だけ・・・・・・・・・・・・」

力強く、でも壊れ物を扱うように優しく彼の腕の中に納まつた。

一体、何が起こったんだろ？と状況確認も出来ぬまま、なすがままの私がいた。

どれくらいの時間が経つんだろう?
多分数分の出来事なのに、何時間もそのまま抱きしめられてる気分
だった。

「『じめんね。』

そう言つと、彼は体操場から立ち去つた。

残された私は、ただただ呆然と立つてゐるのみだった。

その日は何事も無く、無事に短期教室と通常レッスンを終えバイト仲間と飲みに行く事になつた。

笹川さんも、いつもと変わらぬ様子でレッスンをこなしていた。ついつい、レッスン中も見てしまう。

私は、飲みに言つても彼の事が頭から離れない。

思い切つて、ゆきちゃんに聞いてみた。

「笹川さんつて、今日主任に怒られたの？」

「どうして？」

「だつて、落ち込んでるといひ匂ひやつたから・・・・・・」

すると、一緒に来ていた飯野君がいろいろ教えてくれた。

なんでも、自分の思うように仕事がすすまないらしく、同期入社の大野さんといつも比較され

相当ストレスがたまつてゐらし。

何だか、納得できるような、出来ないような・・・・・・

その辺りで笹川さんを忘れて楽しく飲んだ。

帰りは、短期教室の疲れを吹き飛ばそうと、カラオケに行つた。プールで大きな声を張り上げてゐるのに、『iji』でも大声を張り上げて2時間後にはスッキリした。

明日は短期教室がないので、ゆっくりと眠れるから盛り上がつた。

その余韻を引きずりながら、私だけが別方向なので、飯野君やゆき

ちやんと別れた。

酔い覚ましにはちょっとどいい感じの夜だった。
家に向かって、歩いていると携帯がなった。
着信を確認すると笹川さんだった。

「はい・・・・・・・・・・・・

「あつ、じめん。笹川だけど、今大丈夫?」

「はい・・・・・・・・・・・・

「今日はばいめんね。突然でびっくりしたよな・・・・・・・・・・

「はい・・・・・・・・・・・・

「でも、明日バイト休みでしょ。今から、あいつと出れる?」

「えつ?」

「つていうか、今どこにいるの?」

「飯野君とゆあちやんと飲んで、カラオケ行つた帰りだけど・・・・・

「じゃあ、そんなに離れてないよね。駅の向こうのカフェに来れる
?」

「はい・・・・・・・・・・

「じゃあ、そこで待ってるから…………」

そう言って電話は切れた。

一体どうなってるんだろ？

昼間の件があるから、ちょっと抵抗があつたのは事実。色々と理由をつけて、行けないって言えば良かつたのに言えなかつた。

頭の中いろいろな考えが廻る。

結局、彼より先にカフェに着いたみたいだつた。

呼び出しどいて、まだ来てないって・・・・・・なんて思いながら鞄から本を取り出して読んだ。

今時は、携帯で読むもんだつて言われるけど、本の匂いが大好きだからという理由で

未だに本を持ち歩いてる。

そんな私にゆきちゃんは”天然記念物”と愛情を込めて呼ぶ。

「何、読んでるの？」

読書に没頭しすぎて笹川さんが向かいに座つてゐるのも気付かなかつた。

慌てて本を鞄に片付けた。

「急にどうしたの？びっくりしたよ。」

「「めん、「めん。ちょっと話したくつてさ・・・・・・」

そつと、普段の笹川さんのまま、いろんな話をした。

つい、昼間の出来事も忘れてしまつくらい盛り上がつた。

私と彼の共通点とすれば、実家から離れて私は一人暮らしで彼は寮

生活。

親元を離れて生活する寂しさや、自由や責任感を痛感している。話題はそんなところまで及んだ。

「そうだ、木村さん歩きだよね。ちょっと行かない?」

「はっ? 今何時だと思つてんの?」

「いいじゃん、一人でしょ。あつ、彼氏待つてるとか?」

「いや、その…………彼氏はいないけど…………」

「じゃあ、誰か待つてる?」この後に何か予定あつた?」

「いや、それは残念ながらないんだけど…………」

「じゃあ、決まりね! 行こ! 」

カフェの前にバイクが停まつてた。

バイクに跨り、ヘルメットを私に差し出す。

バイク音痴な私は、載りかたすらままならない。そんな私を見かねて、手を差し出してくれた。生まれて初めてバイクに乗つた。

「大丈夫? しつかり持つててね。」

そう言つて笠川さんは身体に私の腕を巻きつけた。

「持つって、お腹もつの?」

「あたりまえじゃん！他にビニ持つの？自転車の2人乗りと同じ要領ね！」

違うのは、スピードがかなり出るから・・・・・行くよつー。」

バイクが音を立てて走り出した。

私は笹川さんにしがみついた。

何も聞こえないくらい、スピードが出てる。

初めてだから、そう感じたのかも・・・・・・

風を切る音と笹川さんの鼓動だけが聞こえる。

不思議な気分になった。

「はい、到着！大丈夫だった？」

顔を上げると、海に辿り着いていた。

バイクから降りて、波打ち際まで歩いた。

途中、砂浜で何かに躓いた。こけそうになつたのを、笹川さんが助けてくれた。

「はい・・・・」

自然に手を差し出す。さすが年上！と変に感心。何の抵抗も無く、手を繋いで歩いた。

波打ち際まで行くと、自然と手を離していった。

「俺さ、結構嫌な事があつたりすると、ここに来るんだ。」

「そりなんだ。海、好きなの？」

「なんかさ、波の音を聞いてると、自分の悩んでる事とか、ちっちえーなつて思うんだ。」

確かに、波の音を聞いてると自然と心が落ち着く。

「知つてた？波の音って、胎児のときお腹の中で聞いてた音に似てるんだって。

「この前、授業できいたよ。だから、落ち着くんじゃないの？」

「やうなんだ……・知らなかつたなあ……・」

一人して、無言で波の音を聞いていた。

「俺さ……・弱い人間なんだよね。色々抱えちゃつて……・

・・・・・

今日もそれでどうしたらいいかわからなくなつちやつて……・

・・・

それで、木村さんに甘えひがつたんだ。びっくりしたよね……・

・

「そりや、もう…かなり驚いたよー。」

「でもさ、それでわかつたことがあるんだよね……・

・

「すつゝこ、血口卑な意見だけど……・

・

「なにになに？？」

あの時の田と同じ視線でこっちを見つめてくる。

また、身動きが出来ない。

そのまま近づいてきて、脣間と同じ感じで抱きしめられた。

今度は、すごく優しい感じだった。

何も言えなし

でも 私にも思ひ立たる事もある
はつきり言えるのは、嫌じやないこと。

実は私も落ち着いてくる

笹川さんの体温の暖かさや匂いもまた薄れ、
自然に私の手も、笹川さんを抱きしめていた。

お互に動けず、たた抱き合っていた。

自然と勝の力が絆少しお互いの身体が少し離れた
思わず笹川さんの顔を見上げた。

彼の顔が近くなる。

唇に触れる暖かくつて優しいキスだった。

抱き合つてはキスの繰り返し。

キスをする度に、私の心の中に温かいものが広がる。

初めての感じだつた。

それまでは、男性として意識なんてしたこと無い。
まさか、こんな感じでキスまでしてしまったなんて・・・。
でも、不思議と嫌な感じが無い。
ふわふわと暖かい気持ちのまま、家に送つてもらつた。
バイクの後で、いろいろ考えた。

好きつて気持ちには、始まりがなく突然気付くものなんだ。

つて事は、これが恋なのかな？
でも、あんなにとろけるようなキスは初めてだつた。

「のまま分かれるのも寂しく感じる。

「お茶でも飲んでく？」

ドキドキしながら聞いてみた。
キスしただけで、あんなに幸せな気分になれたから・・・・・
そんな事が頭をよぎる。

「えつ、いいの？
じゃ、1杯だけ・・・・・・・・」

初めて、自分の部屋に男性が入ってきた。

「「めん、やっぱ散らかってるね。
こんな事なら、普段からキレイにしどけばよかつた。」

「大丈夫。十分片付いてるじゃん。」

そういうながら、彼は私を抱きしめた。
またお互いが求めるように唇を重ねる。
とろけるようなキス。

身体の中が、暖かい気持ちで満たされる・・・・・・
少し身体が離れる。
彼の顔を見つめると、すく優しい笑顔だった。
思わず私も笑顔になる。

突然始まつた恋……

このまま優しい時間が続きますよつこ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4096o/>

突然に・・・・

2010年10月20日02時46分発行